

「本の日」ブックカバー大賞 受賞作品・受賞者一覧

賞名	作品名	作者名（ふりがな） ※ペンネーム含む	作者所在地	職業	作者コメント	評	作品データ
大賞	本のまち	セキサトコ	山口県	イラストレーター	本をまちに見立てて、本を自由に楽しむ人々を描いた作品。「本の楽しみ方は自由である」という意味を込めて様々な姿を描いた。ブックカバーとして使用した際のことを想定し、どの部分で切り取られても楽しいイラストを心がけた。よく見ると道路が「本の日」という文字になっているところもポイント。	2年ぶりの「本の日」ブックカバー大賞。前回の倍以上の516作品の応募があったことに素直に喜んでしまった。テーマが「読書が楽しくなるブックカバー」ということから、どの作品も読書という言葉から広がるイメージをいろいろな形で表現しており、独創的なものが多くみられた。そのため、大賞の選考にはとても頭を悩ませた。今回から実施した書店員からの投票結果も参考にした結果、「我々の日常の中に本がある」、「街に本が溢れ、生活のいろいろな場面で楽しく本を読む」といったことを華やかなイラストで表現しているこの作品を大賞とした。この作品は広げて全体を見ると「本の日」という文字が道路として描かれており、本の形にはさりげなく「1月1日」と書かれている。また、本に巻くとその華やかさが際立ち、魅力的なブックカバーとなる。まさに「本の日」そして今回のテーマに合致した作品である。次回の「本の日」ブックカバー大賞もまた、本の日に相応しい読書の楽しさを伝える創造的なブックカバーのデザインを期待したい。 （「本の日」実効委員会委員長 矢橋 秀治氏）※「本の日」ブックカバー大賞総評	
「イラストレーション」編集長賞	ふしぎなせかい	なりた きよし	神奈川県	学生	まる、さんかく、しかく…様々な図形のシルエットになった不思議な生き物たちは、本の世界の多種多様な楽しみを表すモチーフとして描きました。ときに面白く、ときに悲しく、気持ち悪く、恐ろしく、優しく。全体的には「普通じゃない、けど普通でもある」デザインを目指しました。本の期間限定ということでも一般的に書店でかけられるブックカバーとは少し毛色の違うインパクトを残しつつも、老若男女問わず誰でも街中で使えるようなデザインや色遣いを意識して制作しました。コロナ禍でもあり、今は家から出ることなくネットで本を簡単に手に取ることができます。そんな時代でも直接書店を訪れることで思いがけず未知なる本と巡り会うこともあると思います。書店に来たときにしか出会えないこのブックカバーというものが、そのきっかけの一つに少しでもなれたらいいなと感じています。	不思議な模様のようにでもあり、生き物のようにでもあるところに惹きつけられた。色遣いを含め、ブックカバーという使用用途を意識している点も良いと思う。 （「イラストレーション」編集長 竹内 康彦氏）	
「芸術新潮」編集長賞	目も皿にして読み耽る	小林大悟（こばやしだいご）	東京都	自由業	平日頃読書が好きなので、特に本を夢中になって読んでいる様子を描写したいと考えました。そこで「目を皿にする」という慣用句を文字通りになぞり、本を読む河童のおめがめがお皿になっている姿を描きました。浮世絵の構図や現代美術家のクリストのテッサンを参考にして、お皿と河童が目飛び込んでくるような、シンプルかつインパクトのある構成を担いました。	絵のトリミングが大胆で良い。折返しの部分で片目が隠れることで「何なんだろう？」と興味を惹くデザインに変わるところにも面白さ、楽しさがある。 （「芸術新潮」事業部 部長 吉田 晃子氏）	
「アイデア」編集長賞	はじまりとおわり	徳永実華（とくながみか）	兵庫県	学生	本は全てがハッピーエンドなのではない。モヤモヤしたまま終わるもの。次へ続くもの。終わりがよくわからないもの。はじまり方だってみんなそれぞれ。そんな本のはじまりとおわりを、ボールペンにのせてみた。はじまりがきゆうとしたもの。ぐちゃぐちゃになっているもの。いろんなものがある。たくさんものがある。私はこれからも、ずっと、本を読む。	さまざまな本の「はじまりとおわり」がボールペンの筆致の差異に置き換えられた書道的な表現が新鮮だった。シンプルながらも横長の画面を活かしたリズムカルな構成にも魅かれた。 （「アイデア」編集長 西 まどか氏）	
「美術手帖」編集長賞	ブローグ	大久保滯（おおくほみお）	神奈川県	学生	文学者のサミュエル・ジョンソンは「作家は本を始めるだけで、読者が本を終わらせる。」という言葉を残しています。このブックカバーも、読者と一緒に作り上げていくようなデザインにしたいと思いました。私が始めたストーリーがどのように繋がっていくのか、とても楽しみです。	気持ちの良い絵。コロナ禍によって家で読書する人も増えたが、屋外で本を開く心地よさを提案してくれているところがよい。 （「美術手帖」編集長 岩淵 貞哉氏）	